

根付研究 最前線 「現代根付の醍醐味」

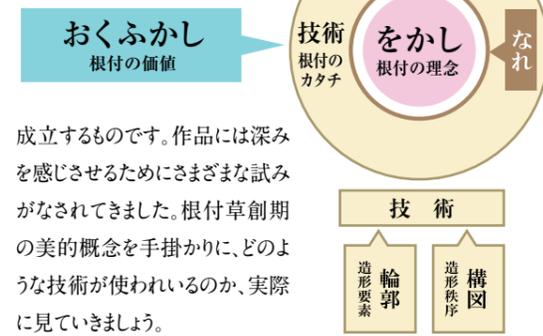
公益財団法人 京都 清宗根付館
学芸員 大西 忠雲

元禄期に京・大坂を中心に世間道具にまで昇華した根付は、これに先立つ、寛文 11 年（1671）年、俳諧師・山岡元隣の仮名草子『寶藏』にその語が初出し、元隣はここで根付への想いを次のように述べています。「根付の出来栄を目やると、形姿は僅かに二寸半ほどだが、その内（意匠）を鑑賞する際は、大変深みがあって心惹かれる感じがする」。この言説が端的に示すように、根付はその成立前夜から現在に至るまで、この＜心惹かれる＞点は何よりのポイントなのです。心惹かれるとは、生まれてきた作品への知的なときめき、言い換えるなら、作品が備えるデザイン・構成・技術に引き込まれていく感情です。ただし、これは作り手の手によって発現されますが、しかし、そこへと至る、使用者・鑑賞者・発注者と書いた担い手の存在なくしては叶いません。作り手の唯一無二の独創性は、時に根付の枠を越えようとする。しかし、それを根付へと止まらせ、そこで独創性を発揮させるのが担い手の鋭い審美眼です。そして、作り手の独創性と担い手の審美眼との飽くなきぶつかり合いが、言うなれば、作り手と担い手との＜熱い想い＞の充溢が、根付を心惹かれるものへと昇華させていきます。時を超え、後世、根付を玩弄せずにはいられなくなる衝動、つまり「なれ」という雅趣は、正にこの熱い想いによって引き起こされるものなのでしょう。過去ではなくまた未来でもない、今、この時をめぐる独創性と審美眼による共創、ここに現代根付の醍醐味があります。そして、こうして出来上がる＜心惹かれる＞感覚が、引き寄せたい感じ

がする様を原義に持つ、我が国固有の「をかし」という美的理念に淵源を持つことも見逃してはならないでしょう。

● 根付をささえる美的概念について

根付が初めて文献に登場するのは寛文十一年(1671) 刊の『寶藏（たからぐら）』という「をかし」(知的な観察によって起こる情趣・風情)を極める俳諧の指南書でした。それに則ると根付における主題は「をかし」にあり、それは作り手の表現力と担い手の審美眼の芯となる美的理念と言えます。そこに作り手の見事な技術によって完成されたのが『おくふかし』（深みがあってさらに奥のことが見たい・知りたいという直感的な心情）という価値感です。この「おくふかし」にまで昇華させるのが、本展で取り上げる根付のカタチであり、輪郭と構図が相まって



成立するものです。作品には深みを感じさせるためにさまざまな試みがなされてきました。根付草創期の美的概念を手掛かりに、どのような技術が使われているのか、実際に見ていきましょう。



AUTUMN ~WINTER Issue. 06

- [目次]
- 企画展の見所
- 清宗根付館便り
- 第8回「ゴールデン根付アワード」授賞式開催にあたって
- 根付研究最前線

[発行元]
公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生 賀陽御所町46番地(壬生寺東側)
電話 075(802)7000
www.netsukekan.jp/



日本で唯一の現代根付専門美術館 京都 清宗根付館『企画展』のご案内 根付。受け継ぐ誇り『伝統の深化』展

本展では日本文化の継承と挑戦の中で生み出された最新の根付に焦点を当て、躍動を続ける伝統のうねりを紹介します。遡れば 16 世紀後半の安土桃山時代、出雲の阿国（おくに）によって四条河原で人気を博した、かぶき踊りは、傾（かぶ）いた衣装に、たくさんの提げ物で加飾をして、当時の流行歌や台詞を採り入れた寸劇で踊ったとされます。のちの歌舞伎、根付、歌舞踊への端緒となりました。17世紀前半徳川幕府による都市と街道の整備や、商業、農業の発達をもたらした高度成長を背景に、武家のみならず農民や町人等の庶民層までもが繁栄を謳歌したなかで新しい文化が幕を明けていきました。

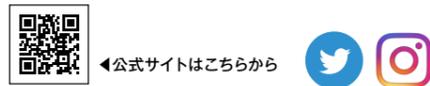
その代表的な場所が悪所場（あくしょば）と呼ばれた遊里と芝居町でした。女性による歌舞伎が寛永6年(1629)年に幕府に禁止されてからは遊里へと移り、三味線や歌謡と共に座敷舞として収斂していきました。遊里では武士と町人の身分の別もなく、趣味や教養による「卓越化」によって独自の社交界を形成しながら美術や和歌俳諧、芸能などの日本文化が花開きました。根付もこうした場で披露され、吟味されました。時代の変遷のなかで創意工夫されて発展した「歌舞伎」と「小唄」を題材しながら、現代作家によってさらに深化させた作品を特集します。

2022年 1月～3月の特別企画展のご案内

1月 牙えわたる影技 「森 哲郎」展 ■ 1月6日(木)～30日(日)	2月 しみじみとした情趣 「工藤 道齋(茂道)」展 ■ 2月1日(火)～27日(日)	3月 あふれだす物語 「田神 十志」展 ■ 3月1日(火)～31日(木)
---	--	--

京都 清宗根付館 公式ホームページのTwitter, Instagram にて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第9回 水木十五堂賞受賞（奈良県大和郡山市より授与）
家庭画報 2月号に掲載、NHK プレミアム「美の壺」出演



コロナウイルス感染症による感染拡大防止への取り組みに関して

- ・入館時にスタッフにより、非接触による検温と手指のアルコール噴霧をいたします（37.5度以上の発熱がある場合は、入館をお断りさせていただきます）。
- ・万が一、コロナウイルス感染者が発生した際の対策のため、入館時に住所・氏名等のご記入をお願いしております。
- ・マスクの着用にご協力をお願いいたします。当館スタッフもマスク着用で業務にあたらせていただきます。

京都 清宗根付館とは

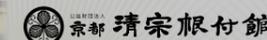
当館は、佐川印刷株式会社 代表取締役会長CEO 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね（宗）とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、＜魅せる＞＜育む＞＜繋がる＞を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。



告知ポスター

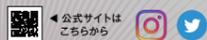


佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。



Public Interest Incorporated Foundation KYOTO SEISHU NETSUKU ART MUSEUM
〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町46番地1(壬生寺東側) 電話:075(802)7000

Please refer to our website for more information
www.netsukekan.jp/ 京都清宗根付館 | 検索



10月～12月 企画展の見所

※掲載の根付は原寸サイズです

10月 ■10月1日(金)～31日(日)

粹といなせと、艶っぽさ

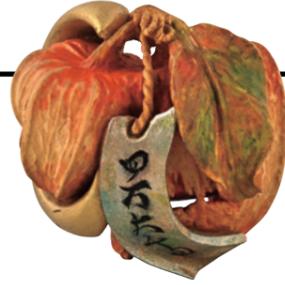
「小唄」展

小唄は短い歌詞の歌いもので室町時代の狂言小歌や、江戸時代中期に三味線の普及とともに流行した端唄（はうた）から派生して、明治期には粹で艶っぽい「小唄」に発展しました。座敷などで披露される小唄は爪弾きの三味線に合わせて男女の仲を情感たっぷりに、時には軽妙洒落な節回しで歌うのが魅力です。今回、根付作家がそんな小唄の世界を視覚化するという難しい作業に挑戦しました。各作家のアイデアと技能の冴えをお楽しみください。



「うらぶれし」 高6.0cm
山本 伊多呂 (1961～)

吉田屋の遊女夕霧太夫と伊左衛門の一途な恋心と、大団円を迎える筋立ては上方歌舞伎の代表作。小唄でも人気で、落ちぶれた伊左衛門のいじらしさを唄う。



「四万六千日」 高3.9cm
黒岩 明 (1949～)

浅草寺の観世音菩薩の縁日に参拝すると四万六千日の功德があるとされる。その縁日帰りにほうずきを買って以来逢えぬ主人を偲ぶ哀情をせつせつと唄う。



「お互いに」 高2.8cm
栗田 元正 (1976～)

“お互いに 知れぬが花よ 世間の人に”道ならぬ恋は二人だけの秘密であればあるだけ燃え上がる。二人が衝立に隠れて、恋の行く末の戸惑いを表現している。

11月 ■11月2日(火)～30日(火)

栄冠へ。甲乙つかぬ力作揃い

ゴールデン根付アワード

「秋の名品」展

根付の誕生以来約4世紀にわたって受け継がれてきた伝統と、現在を生きる作家が探究する「革新」は常にせめぎ合いながら作品を深化させています。伝統を継承することは根付とそれをとりまく周辺さまざまな文化を一段彫り下げて理解することであり、そこから自らの存在を見直す契機となります。当館では現代根付作家による自由で新たな挑戦を奨励するTHE GOLDEN NETSUKE AWARDS※を設け、優れた作品を表彰しています。

※当館で展示された新作根付の中から総合的に優れた作品に与えられる賞。



THE GOLDEN NETSUKE AWARDS グランプリ

「日の本へ」 高3.7cm
針谷 祐之 (1954～)

ギリシャのオリンピアにあるヘラ神殿跡で採火された聖火を開催国「日本」へ飛脚が運ぶ姿を根付にしている。聖火は琥珀を象嵌し光沢感を際立たせている。



THE GOLDEN NETSUKE AWARDS グランプリ

「旅役者」 高5.9cm
及川 空観 (1968～)

へ待ってましたの掛け声にニコリ笑って見得を切る…そんな歌いだしの小唄「旅役者」より、一座の看板役者と、その役者鼻唄（ひいき）の町娘。果たして二人の恋路の行方は？

12月 ■12月1日(水)～29日(水)

隈取り、大見得、人情味

「歌舞伎」展

出雲の阿国によって京で始められた「かぶき踊り」。その頃に流行した「傾き者（かぶきもの）」の、奇抜な扮装やしぐさを取り入れた踊りが現在の歌舞伎のルーツとされます。現在ではユネスコ無形文化遺産にも記載され、日本固有の伝統芸能として認められています。代表的な歌舞伎作品を題材にして根付ならではの発想で表現した作品が見得を切って勢ぞろいします。



「鳴神」 高9.3cm
向田 陽佳 (1968～)

歌舞伎十八番を代表する演目「鳴神」の柱巻きの見得を切る名場面を表しつつ、舞台の配役や筋立てを同時に示すことで物語に深い解釈を感じさせる。



「隈取」 高3.3cm
矢戸 濤雲 (1960～)

隈取(くまどり)は元禄歌舞伎で活躍した初代市川團十郎(1660～1704)が始めた。赤色(紅色)は正義役、藍色は敵役、茶色は鬼や妖怪役に使われる。



「鏡獅子」 高4.5cm
高木 喜峰 (1957～)

能から翻案された「石橋物(しゃっきょうもの)」。前半の気品ある娘役と後半の荒々しい獅子役の演じ分けが見どころ。象嵌を駆使して華やかに仕上げている。

清宗根付館 だより

根付作家による「ギャラリートーク」を開催

7月22日13時より根付作家・及川空観氏によるギャラリートークを開催しました。今回、参加されたグループはさまざまな美術館を月に1度訪問されていらっしゃる美術愛好家の方々でした。今回は作家と直接対話できることに興味津々で、積極的に質問もされて、当初の予定ではトーク1時間・鑑賞1時間で計2時間の予定でしたが、最終的には3時間半にわたり根付を楽しまれました。



特に、空観氏がデッサンを見せながら創作の課程や作品への想いを説明したり、彫りの実演をしたりすると熱い視線を注がれていました。

当館では、新型コロナウイルス感染症の動向も鑑みつつも、蒐集・保管・展示・研究といった学芸活動だけに留まらず、こうしたギャラリートークや鑑賞教育を通して皆様と「つながる」美術館を目指し活動してまいります。



優秀賞

「不死鳥」 高7.8cm
時田 英明 (1979～)

死んでも蘇ることで永遠の時を生き続ける伝説があることから不死鳥と呼ばれる。アフターコロナの世のなかの再生を願い、鹿角の再生力にあやかっ制作。

理事長賞

「疫病退散 虎狼難(コロナ)」 高5.3cm
小野里 三味 (1967～)

コロナに「虎狼難」と当て字をつけて、見えない敵を具象化。「疫病退散」の守護神である、不動明王が綱索(けんさく)で捕まえ、剣で退治している。

第8回「ゴールデン根付アワード」授賞式 開催にあたって

伝統とは「ある集団において歴史的に形成され、世代をこえて受け継がれた精神的文化的遺産」と定義されるように、私たちの連帯を深める普遍的価値を表現したものに他なりません。根付の伝統もまた、日本人の精神性を鮮やかに彩り、潤いと息を伝えてきました。

しかしながら根付の伝統は明治期に廃刀令や洋装化の憂き目に遭い、海外に輸出されました。数名の作家により命脈を保ちました。そうしたなか、1970年代には現代的な感覚を伴った現代根付を再興する機運が盛り上がり、徐々に根付の作り手が増えてきました。

そこで日本固有の芸術である根付を、根付発祥の京都に残したいという一念から当美術館を2007年に開館しました。現代根付作家

たちは日ごろから新しい表現を模索し、意欲的に挑戦をすることで、歴史のなかで醸成された伝統を引き継ぎつつ、今まさに新たな地平を開拓しています。当館では各作家のアーカイブ化を進め、軌跡を辿れるようにしています。

我々は作家たちとの交流を通し育成することを目的に2014年からゴールデン根付アワードを創設し、優秀作品を選出し国内外にその栄誉を発信しています。今年も多くの有力な作家が挑戦してくれました。その受賞作品とノミネート作品とを一堂に公開いたしますので、ご高覧ください。

公益財団法人 京都 清宗根付館
代表理事 館長 木下 宗昭